三浦市大浦山洞窟出土の弥生式土器

神沢勇一

一、序

三浦半島に於ける洞窟遺跡出土の弥生式土器研究の一部として、本稿では大浦山洞窟遺跡出土の資料を検討することとした。

大浦山洞窟は、神奈川県三浦市南下浦町松輪小字間口にあり、大浦山の西側山腹に開口する海蝕洞窟で、内部には上下二層の遺物包含層が堆積している。弥生式土器はこの両層から出土するが、上層のものは和泉式土器と混在し、その特徴から前野町式土器に比定され、下層のものは単一な形で存在し、久ヶ原式土器に定されていた（註1）。

しかしながら、現在の知見を以ってすれば、本洞窟出土の弥生式土器は、単に前野町式土器・久ヶ原式土器として理解できないものがあり、加えて最下層からは、これらとは特徴を異にする土器が出土しているので、改めて全資料の再検討を行いたいと考える。

二、出土土器の分類

分類にあたっては、上層と下層の絶対的な分離がやや困難であり、さらに部分的な攪乱もあるので、いちおう一括して行うこととする。資料の総量はリンゴ箱に半分程度で、その大部分は特徴に乏しい小破片であるが、形態には壺形甕形の二種が認められる。

壺形土器

量的にごく少ないうえ、型式的特徴が伺えるものは僅か四例にすぎないので、しいて類別することを避け、個別的に記述する。

口縁部破片――4・粘土紐を添加して形成された厚い複合口縁の上に、押捺の加えられた二本一組の隆起線が貼付されている。口縁の外反の度は強い。胴部破片――1・器面は箆で磨研され、比較的細かい斜行縄文＜LR＞を地文として箆描きの平行沈線文が描かれている。2・断面からみてかなり胴の膨らんだ器形が考えられる。器面は刷毛で調整ののち箆で磨研されている。文様は櫛歯状器具で描かれた波状櫛目文帯を主体とし、その下端には同一施文具による点列が、上部には無節の縄文＜R＞帯が配され、文様帯以外は丹彩されている。3・櫛歯状器具による、いわゆるコムパス文様が描かれている。5・胴の中央部破片。器面は箆で磨研されている。底部破片――6・推定直径六センチ。器面は箆で磨研され

ている。以上の諸例はいずれも、土質・焼成ともに良く、硬く、焼緊っている。

甕　形　土　器

部分的な特徴によって四類に細分される。

第一類・口縁部の外反の度が小さく、胴部の膨らみの少ないもの。(7)一例である。口縁は、あたかも指頭によるかの如き大きな押捺が連続的に加えられた結果、ゆるやかに起伏している。胴部はほとんど膨らみをもたずに底部へ移行する。器面は箆で調整されているが多少の凸凹を残す。土質は密で、焼成も良好であるが、外面の色調は黒色を呈する。器壁は他類の土器と比較して、かなり厚い。この土器は下層の最下部から、他類の甕形土器を全く混えずに出土している。

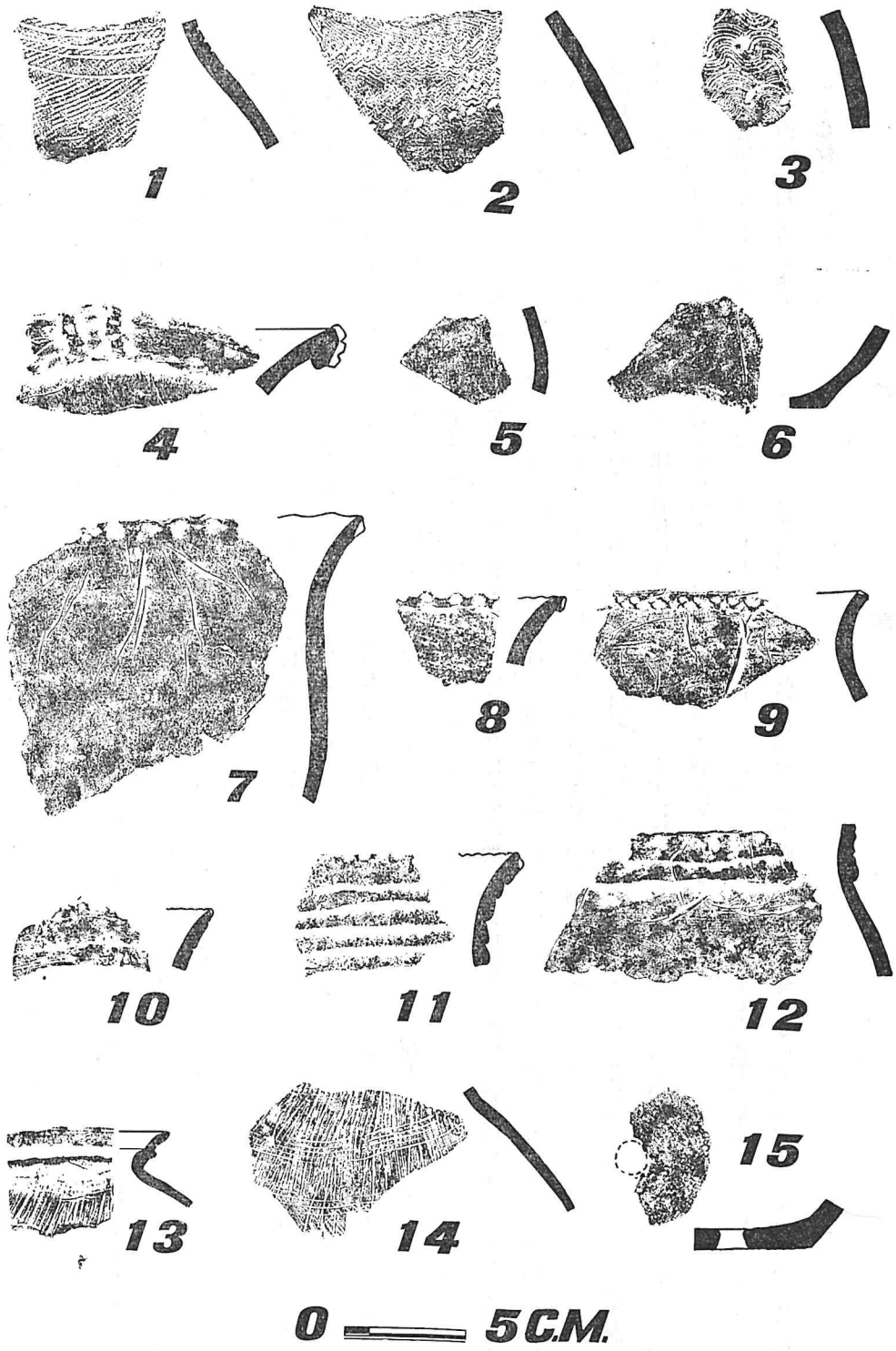
第二類・頸部以上に粘土紐を重ねた装飾帯をもつもの(10・11・12)。口頸部は粘土紐を捲きあげた輪を重ねて構成される。口縁部はゆるやかに外反し、口縁は箆による連続的な押捺の結果、複雑な小波状を示す。中には口頸部の装飾部分が箆又は指頭で調整されたため、粘土紐が丸味を失い、粘土紐の接合部分も僅かな凹みをとどめるに過ぎないものもある(10)。この種のものは毘沙門B洞窟遺跡の甕形土器第二類に近似している(註2)。頸部は段をもって下膨らみの胴部に移行する。胴部の器面は箆で調整の後、刷毛状器具で仕上げられる。土質は一般に粗悪で、径二ミリ前後の小石を多量に含む。焼成も不良で色調は黝黒色或は暗褐色を示す。

第三類・口頸部に粘土紐による装飾帯を欠くもの(8・9)。口縁の外反の度は第二類と比較して強い。口縁は複雑な小波状をなすもの(9)と単純な押捺をもつもの(8)とがある。器面は箆および粗い刷毛状器具で調整されてはいるが、粘土中に含まれた石粒の移動による擦痕が著るしく、全体に粗雑である。土質は径二ミリ前後の小石を多量に含み、焼成も不良で、色調は暗褐色を示す。

第四類・段をもつ小さな口縁部が強く外屈するもの(13・14)。口縁部は短かく、その形状はきわめて特徴的である。口縁部の器面は美くしく調整されているが、胴部はやや粗雑な鋭い刷毛目様の文様で覆われ、その上部には同一施文具による平行沈線文が数例めぐらされる(14)。器壁は薄く、三ミリ程度にすぎないが、焼成はきわめて良く、堅緻である。色調は灰白色を示す。

これら各類の甕形土器は、一般に器台をもつものと考えられる。なお、ただ一例であるが穿孔をもつ底部破片がある(15)。これは製作の程度からみて甑に利用された甕形土器の底と考えられるもので、復元直径約六センチの底の中央に、焼成後底面から直径一センチの孔が穿たれている。出土層位は下層である。

三、考　察



大浦山洞窟出土土器

（最下層出土土器・1，7，　下層出土土器・2—6，8—18，15　上層出土土器・13，14，）

大浦山洞窟遺跡出土の弥生式土器は、前述の如く、二形態四類に細分される。次にこれらの出土位置と伴存関係をみると、以下の如くである。すなわち、壺形土器1と甕形土器第一類は、他類の土器を混えずに、下層最下部の黒色砂層から出土している。この層は、混貝砂層である下層とは多少異なり、最下層として分離さるべきものである。従って、ここから出土した土器は最下層出土土器として一括する。次に、壺形土器2・3・4・5・6と甕形土器第二類・第三類は、いずれも下層から出土しており、量的に本遺跡出土の弥生式土器の主体をなしている。これらを下層出土土器とする。また、甕形土器第四類は、主に上層から出土しているので、これを上層出土土器とする。

最下層出土土器

従来、下層出土土器として一括されたものであるが、これらの器形・文様は後期弥生式土器のそれとはかなり相違がある。すなわち、壺形土器1の縄文を地文とした細い篦描き沈線の文様構成は、後期には類例のないもので、中期後半の特徴である。また、甕形土器第一類の器形も、中期後半の宮の台式土器の甕形土器の特徴と一致するものである。さらにこれらの土器は、前述の如く、出土位置に於いても他類とは異なるのであって、以上の点から、最下層出土土器は宮の台式土器に比定さるべきものと考えられる。

下層出土土器

かつて久ヶ原式土器に比定されたものであるが、そのうち、久ヶ原式土器に相当する特徴を備えたものは、壺形土器4と甕形土器第二類だけである。しかしこれらでさえも、例えば壺形土器の破片の中に山形の磨消縄文が認められず、甕形土器も下膨らみの器形をとる点、典型的な久ヶ原式土器とは多少異なっている。この差異は、これらが久ヶ原式土器の中で比較的新らしい時期に属する以外に、地域的な差異らしく思われる。

次に甕形土器第三類であるが、器形・製作手法に於いて前者と異なっており、その特徴は弥生町式土器の甕形土器のそれと一致している。前者との層位的関係は確認できないが、弥生町式土器に比定して支障ないと考えられる。

なお下層出土の土器には、この他に、南関東地方の弥生式土器型式に比定することが不可能な壺形土器2・3がある。その全形は詳らかでないが、櫛目文を主体とする文様手法は南関東地方の弥生式土器には類例がなく、また中期宮の台式土器の櫛目文とも文様構成を異にしている。一方、全く同様な文様構成は、東海地方西半の後期前半の土器に類例がある。したがって、2・3は、久ヶ原式土器・弥生町式土器の何れに伴出したかは不明であるが、東海地方から伝播されたものか、或は模倣した土器と考えられる。

上層出土土器

かつて前野町式土器の一形態とされていたものである。最近では、同式から分離され、同式の次に編年される可能性が強い土器であるが、未だ明確な分離がなされるに至らないので、広義の前野町式土器としておきたい。

以上の如く、大浦山洞窟出土の弥生式土器には四型式の存在が認められるが、それらの形態の組成は、一般遺跡の場合と異なり、壺形・甕形のみで、小形壺形・浅鉢形・高坏・器台等は存在しない。こうした形態組成の特異性は、洞窟居住者の特殊な生活形態に原因するものと推察される。

四、結　　語

大浦山洞窟出土の弥生式土器には、宮の台式土器・久ヶ原式土器・弥生町式土器・前野町式土器の四型式と東海地方的な土器二例の存在があり、本洞窟の利用がかなり長期間にわたることが知られた。このうち、特に注意すべきは最下層出土の宮の台式土器であって、従来は後期久ヶ原期以後とされていた海蝕洞窟に於ける生活の開始が、中期後半にまで遡ることが明らかとなった。次に、壺形土器2・3は、東海地方的な土器の洞窟遺跡出土例の最初のものであるが、東海地方との交渉を物語る点に於いて、その性格の解明を重視したい。また、各型式の形態組成は、本洞窟遺跡に於いても、毘沙門B洞窟遺跡・間口洞窟遺跡の場合と同様な状態であった。これは洞窟遺跡の土器の共通的性格として理解されよう。なお、甑に利用された底部15は、三浦半島に於ける最初の出土例であるが、更に類例の増加が望まれる。

稿を終るに当り、終始御助言と便宜を賜った赤星直忠先生に深く感謝する次第である。

《註1》　赤星直忠「海蝕洞窟――三浦半島に於ける弥生式遺跡――」神奈川県文化財調査報告第二十集（一九五三年）
《註2》　神沢勇一「三浦市毘沙門B洞窟出土の弥生式土器」横須賀市博物館研究報告（人文科学）第2号（一九五八年）